

2024年末に、ある日本人医師が海外での解剖研修において、献体された遺体の前で撮った写真を自身のブログに掲載した件は、ネット上を中心に各種の騒ぎになった。この件は、結果として所属していた病院を当該医師が解任されるという形で事態は収拾されたようになっているが、そもそもなぜこのような騒ぎとなったのか。人々は何に対して怒ったのか。

その理由としてさまざまな面(例えば、炎上案件における初期対応の拙さといった、組織におけるリスク・マネジメント上の問題、

「善意」に込めるビジネスは実現可能か

として、あるいはより単純に海外での解剖研修というネット上での「映え」を満ちたためとしてか感じられない態度による部分が大いなのではと考える。すなわち、提供する側の善意やある種の「想い」に対し、受け取り側である医師の背信と受け取られる姿勢に、人々の怒りの根拠があったのではないか。

市場経済システムの基盤として、市場の当事者間における信頼や共感といった「社会関係資本」と呼ばれる機能が果たす役割は、経済学の祖であるアダム・スミスをはじめ多くの経済学者が言及してきたが、近年のゲーム理論や実験経済学での研究においてもその重要性は確かめられている。献体を一種の「取引」行動

人々のエシカルを ビジネスにつなげる課題

聡

愛知淑徳大学
経済学部教授
渡邊



などが考えられるが、献体という「善意」の寄付行為に対し、医師側が自身の技量向上のための「道具」

と考えるなら、自身の死後の身体を医療従事者の技能向上に役立ててほしいという「想い」に対して、解剖による医療水準の向上という形で返すことで成立すると考えられる。それが献体者(医療関係者)の間で関係性に対する鈍感さ、取引相手に対する無関心が引き起こした事案と考えられてならない。

本件について見聞きする中で、筆者が研究上関わり

わたなべ・さとし 環境・資源
経済学。名古屋大学大学院経済学
研究科博士後期課程修了、博士
(経済学)。1979年生まれ。